

論文番号 55

担当

滋賀医科大学 福祉保健医学講座

題名(原題/訳)

Moderate alcohol consumption and risk of heart failure among older persons

高齢者の中等度飲酒(適量飲酒)と心不全のリスク

執筆者

Jerome L. Abramson, Setareh A. Williams, Harlan M. Krumholz, Viola Vaccarino

掲載誌(番号又は発行年月日)

JAMA. 2001;285:1971-1977

キーワード

無し

要旨

背景:大量飲酒は心不全を引き起こす。しかし、中等度の飲酒と心不全のリスクとの関連性についてはほとんどわからない。

目的:心筋梗塞のリスクをさげる中等度の飲酒が高齢者の心不全のリスクを予測するかどうかを検討する。

研究デザイン:1982年から1996年までの最高14年の前向きコホート研究を行った。

研究対象:調査対象は、コネチカット州のニューヘブーンに在住し、病院や老人施設に入所しておらず、しかもベースライン調査時に心不全に罹患していない高齢者2,235名である。対象者の属性は平均年齢73.7歳、男性21.3%、そして非白人21.3%であった。ベースライン調査前一ヶ月に70オンス以上のアルコールを飲んだ者は対象から除外した。

主要測定項目:ベースライン調査前一ヶ月に飲んだアルコール量と心不全初回発症(生死を含めて)までの期間を測定した。

結果:中等度の飲酒量の範囲で、飲酒量が増加するにしたがって心不全発症者の割合は低下した。ベースライン調査前一ヶ月に飲酒しなかった者(50%)、1~20オンス飲酒した者(40.2%)、そして21から70オンス飲酒した者の1,000人年当りの心不全の粗罹患率はそれぞれ16.1、12.2、そして9.2であった。年齢、性、人種、学歴、追跡期間中の狭心症や心筋梗塞の発症、高血圧、脈圧、BMI、喫煙で調整したところ、非飲酒群を1としたときの1~20オンス群、21~70オンス群それぞれの相対危険度(RR)は0.79(95%信頼区間:0.6-1.02)、そして0.53(0.32-0.88)($p=0.02$)であった。

結論:中等度の範囲内で、飲酒量の増加は高齢者の心不全のリスクを低下させることが認められた。この関係は年齢や性などの交絡因子に関係なく独立した関係であり、また、この関連性は飲酒が心筋梗塞のリスクを低減させることとも関連していないと考えられる。